

メイドから
母になりました 4

夕月星夜
Seiya Yuzuki



RB

レジーナ文庫





ヴィオラ

リリーを攫おうとした
雷の精霊。
なにやら複雑な事情を
抱えている
様子で……？

アラン

リリーの元同僚で、
次期宰相と
目される優秀な官僚。
ただし、性格は
あまりよろしくない。

ルチル

以前、リリーの
相棒だった隠密。
見た目は飄々とした
普通の青年だが、
隠密としての実力は
一級らしい。

アムド

レオナルドと
契約している
風の精霊。
マイペースだが
頼り甲斐のある
青年。

ミリス

レオナルドと契約している
水の精霊。
アムドに想いを寄せていて、
彼のため家事修行に
いそんでいる。

シンド

レオナルドと
契約している
闇の精霊。
ちょっと口は
悪いけれど、
気のいい
お兄さんの存在。



登場人物 紹介

レオナルド

ジルの養父で、リリーの主。
凄腕の魔法使いだが、
情緒に乏しく、人付き合いは苦手。
近頃、リリーへの意味深な
発言が増えた。

リリー

異世界に転生した
元女子高生。
レオナルドに頼まれジルの
『母親役』をしている。
レオナルドへの想いを
自覚し、困惑中。

ジル

レオナルドの養女。
6歳ながら、見習い魔法使いとして
奮闘している。
両親思いで可愛い少女。

目次

メイドから母になりました 4

書き下ろし番外編

才能とはかく有りき

メイドから母になりました
4

一 私が選ばれたわけ

だいぶ夜も深くなつた時間、私——リリー・ルージャは居間に來ていた。私が不在にしていた間の話をしようと、同じ主^{あるじ}に仕える水の精霊のミリスに誘われたのだ。そのミリスは今、近くのキッチンでお茶の準備をしてくれている。

不在だった理由は、私の雇い主である王宮筆頭魔法使いのレオナル・マリエル様の出張に同行していたから。ヴェーデン侯爵家のご令嬢の身に起こった不思議な事件の調査をするよう、レオナル様に魔法省の辞令が出ていたのだ。

メイドである私は留守番でも問題なかったのだけれども、レオナル様に同行を求められた。見習い魔法使いである、彼の養女ジルも連れていくことや、レオナル様には貴族の令嬢への正しい接し方がわからないことがその理由だ。

元々は王太子夫妻に仕えるメイドだった私は、作法諸々^{もうろう}を叩き込まれている。なので、令嬢への接し方についてフォローできると思われたらしい。

そうして向かったヴェーデン侯爵家では、色々なことがあった。

事件は、精霊狩りという恐ろしい存在が、ヴェーデン侯爵令嬢ミリアム様を襲^{わそ}つたことに始まる。その際、エルフの王子ユーフィス様が彼女を守るため、魔法でミリアム様を眠らせた。だが、その事情を知らなかったヴェーデン侯爵は、眠り続ける娘を心配し、魔法を解ける実力者を呼び寄せた。そこで派遣されてきたのがレオナル様というわけだ。

ヴェーデン侯爵家に滞在中、私はそんなエルフのユーフィス様と、人であるミリアム様の恋の仲介をした。

それに、レオナル様を好きだった魔法使いリズさんと、彼女を好きなヨシユアさんとの関係の変化も見届けたつけ。

そして最終日には、ジルが光の精霊さんと契約を交わした。

そんなに長く滞在したわけではなかったけれど、本当に色々あった。けれど、なによりも私の心を揺さぶつたのは、レオナル様が帰宅した時に呟^{つぶや}いた一言だ。

「……誤解、しちゃえばいいのになって……」

お茶の準備をしているミリスに聞こえないよう、小さく口にする。

帰宅してすぐ、ジルが私とレオナル様を好きだと言ったので、私も他意なく二人

が大好きだと答えた。すると、レオナルド様はとても優しい笑顔で私を大好きだと言ったのだ。

レオナルド様は女性が苦手なのに、女性に誤解される言葉を選んでしまうことが多い。そのため、この時も、いつものように悪気なく思わせぶりの発言をしたのだと思っていた。だけど、レオナルド様はさらに意味深なことを言い出したのだ。

『リリーは誤解しないんでしょ？ ……しちゃんばいいのに』

この言葉がどうしても、頭から離れてくれない。

「難しい顔をしています、なにか考え事ですか？ 帰ってきたばかりで疲れているのでしようし、ゆっくり休んでから考えた方が、答えも出やすくなるのではないかしら」お茶の準備を終えたミリスが戻ってきて、私を見て苦笑した。自分でも、今とても情けない顔をしているだろうと思っている。

「そう、かな……」

相槌を打ちつつ、私はふと考え込んでしまう。

ミリスの言うように、疲れているのは事実だ。明日からはいつも通りの毎日になるのだし、ちゃんと休まなければいけない。

私は、レオナルド様の家で炊事洗濯など家事全般を請け負うメイド。仕事はたくさん

ある。

そう理解しているのに、やっぱり考え込んでしまう。

そもそも私がレオナルド様のもとに来たのは、ジルの母親役として王家から派遣されたのがきっかけだった。けれど、今では王家のメイドを辞めてずっと彼にお仕えしたいと望んでいる。レオナルド様もそれを期待してくれているし、私だって、私を母として慕ってくれるジルが可愛くて仕方ないんだもの。

だからこの先、レオナルド様に愛する女性ができるまで、ずっと傍にいさせてほしい。最初は純粹にそう願っていたのに、いつの間にかその気持ちは少しずつ変わっていた。

レオナルド様には幸せになってほしいけど、他の誰かを望まないでほしい。

そんな想いを抱いてしまったのはいつからだろう。それを望む資格なんて、私にはないのに。

何故なら私は前世で、当時付き合っていた人を選ばなかったから。

そう、私には前世の記憶があるのだ。

前世の私は日本の女子高生だったけれど、神様同士の喧嘩に巻き込まれて死んでしまった。予定外の死に対して神様が私にできる精一杯が、一生ものの重い後遺症を抱えて生き返らせるか、この世界に転生させるかだった。神様でも、時を戻して私を無傷で

生き返らせることはできないと説明されたんだ。

当時高校生だった私には、中学生の妹と小学生の弟、必死に稼ぐ父がいた。父は頑張っていたけれど家は貧乏だったので、一生ものの後遺症を抱えて戻ることはどうしても選べなかった。

大好きだから、大事だから、迷惑をかけるわけにはいかない。家族が私の選択を知ればきっと怒っただろうし悲しんだだろうけど、重荷を背負わせたくなかった。

そのため、転生を選んで後悔はしていない。ただ、当時付き合っていたあのひと、一緒に幸せになろうという約束を破ったことが、とても苦しくて辛かった。

今の私にできるのは、あの人を忘れず、また、あの人を好きだった『私』を忘れないこと。だから、この世界で誰かと幸せになって自分の子供を持つなんて、考えることすらおこがましいと思っていたんだ。

だけど、レオナルド様は私にジルという可愛い娘を与えて、家族の一員として迎えてくれた。だから、彼にだけは前世について打ち明けている。

その上で、大切な人を裏切って生きることを選んだ卑怯な私を、レオナルド様はあの人への気持ちごと認めて、受け入れてくれた。

そんなレオナルド様のことを特別に思うのは当然かもしれないけど……その意味が変

わり始めている気がして困っている。心の一番真ん中、あの人がいたところにいるのかレオナルド様がいることが多くなってしまった。それに気付くたび、自分自身に、それはあの人と『私』を裏切ることだよって、言い聞かせている。

なのに、誤解しちゃえばいいだなんて、どうしてレオナルド様はあんなことを言うたの？

目を閉じれば鮮やかに浮かぶ、レオナルド様の整った顔立ちと印象的な金の瞳、そして艶やかな長い黒髪。

この世界において、黒髪は生まれつき精霊さんと契約し強大な魔力を持つ証とされている。そのため黒髪の持ち主は、幼い時には魔力を暴走させる危険性が高く、疎まれることが多い。実際、レオナルド様も子供の頃には虐げられていたと聞いた。

今のレオナルド様は、筆頭魔法使いという地位と美貌から女性にとって憧れの的になっている。けれど、手のひらを返したように迫ってくる女性たちによって女性不信になってしまった。

そんなレオナルド様が私をジルの母親役に選んでくれたのは、私が恋愛という意味でレオナルド様に興味を持たなかったから。純粹に仕事をしてくれる、と期待してもらったのだ。

その期待に^{こた}応えるべく日々を過ごしたことで、レオナル様は私を家族として受け入れ、心を許してくれた。

そう思っていたのに、好きだなんて言わないでほしい。それが家族としてならいい、でも、誤解しなきゃいいだなんて言われたら、どうしたらいいのかわからなくなる。

レオナル様は、新しい恋をしたくないという私の気持ちも願ひも、全部知っているはずなのに――

「リリー、大丈夫ですか?」

ミリスの声で、私の思考は中断された。

「ミリス……」

「ほら、お茶でも飲んで落ち着いてくださいな」

心配そうな顔のミリスが差し出すお茶を受け取り、口に含む。心地よい温もりと優しい香りにホッと息を吐き出すと、ミリスが微笑んだ。

「ふふ、私もお茶を上手に淹^ひれられるようになりましたでしょう?」

「うん、美味しい。晚ご飯のシチューも美味しかった。腕を上げたね、ミリス」

「リリーの教えがわかりやすいからですわ」

にこにこするミリスに、実際、凄く腕を上げたよなと思いつつ私も微笑み返す。

出会った頃は家事ができないと言っていたミリス。折を見て家事を教えたところ、今では留守を任せても安心なくらいの腕前になった。ミリスのやる気があってこそだけど、素晴らしい成長速度だ。

そもそもミリスは普通の女の子じゃなくて、レオナル様と契約している水の精霊さん。

見た目は人間とあまり変わらない。不思議な色合いの青い髪をしていて、澄んだ水色の瞳に華奢な^{きゃしゃ}体つきの美少女だ。けれどとても強くて、一瞬で相手を水の中に閉じ込めちゃう魔法も使える。そんなミリスは、同じくレオナル様の契約者である、風の精霊のアムドさんに恋をしている。彼に美味しいって言ってもらえるように料理の腕を磨いているところが、健^{けん}気^げで可愛い。

「ねえ、なにか悩みがあるのなら、遠慮なく頼ってくださいまし。いつもリリーに助けていただいてばかりなんですもの、私だってリリーを助けたいと思っていますのよ」

眉を寄せつつ言うミリスの声は、とても優しい。本当に心配してくれているんだってわかるから、私は笑って頷く。

「ありがとうミリス。だけど、これは自分で解決しなきゃならないから」

「そうです……でも、いつでも聞きますから、一人で考えすぎないでくださいね」

そうだねと返して、私はそっと目を閉じる。

あの人の声が聞こえればいいのに。レオナルド様に出会うまで聞こえていた、あの人が『私』を呼ぶ声が聞こえたなら、私は変わらずにいられるのに。

それでも、記憶の中のあの人は優しく微笑んでいるだけで、私を呼んではくれなかった。

翌朝、大きな鳥の姿になったアムドさんの背に乗って、私とレオナルド様、ジルの三人は城に向かっていった。私がジルとレオナルド様に挟まれている体勢だ。

「リリー、大丈夫？」

レオナルド様の問いかけに、私は苦笑して答える。

「ええ、さすがに慣れました」

ヴェーデン侯爵領への行き帰りでもずっとアムドさんの背に乗っていたんだもの、慣れない方がおかしい。それに今日は腕の中にジルがいる。

ふわふわのストロベリーブロンドを風になびかせ、大きな青い瞳をキラキラさせてはしゃぐジル。この子を見ていると、それだけで気分が明るくなり、空を飛ぶことへの恐怖心も薄れた。

強い魔力のせいで実家の子爵家に幽閉されていたというジルは、出会ったばかりの時は酷く痩せ細り、人に怯えるそぶりを見せていた。だからこそ、こうして笑ってくれるのがとても尊いことに思える。

見習い魔法使いとして仕事を学びながら、どんどん成長していくジルは、天使のように可愛い私の大事な娘だ。

「お母さん、みてー！ あそこ、きれいだね！」

ジルが指し示した先にあるのは、服飾店が立ち並ぶ一角。一体感を持たせた街並みは歩いていても見応えがあるけれど、上から見るとまた綺麗だ。

「あの辺りはドレスとかのお店が多いの。今度歩いてみましょうか」

「ほんと？ 行きたい！」

可愛い笑みを浮かべるジルに、私もつられて笑顔になる。すると、ジルは続けて別の場所を指差した。

「あ、あの青いのはなにかな？」

「あれは星の観測台。魔法省の管轄だから、そのうちジルも行く」

街の外れ、瑠璃色の屋根をした白い塔を示すジルに、今度はレオナルド様が答える。そんな風にあちこちを眺めながら、近付いてくる城へ視線を移す。

「そろそろ着地する。気を付けて」

「はい」

ジルをしつかりと抱き寄せてレオナルド様に体を預けると、アムドさんが速度を落とすことなく城へ突っ込んで……ちょ、怖い怖い！　なんでジルってば、きやーなんて楽しそうに声を上げられるの？

思わずギュッと目を閉じたら、レオナルド様が小さく笑う気配がする。

「リリー、もうちょっとだけ我慢してね」

「は、はい」

返事をすると同時に、腰に添えられていたレオナルド様の手が私を抱き締める形に変わった。どきんと心臓が跳ねたけど、どうすることもできない。やがて、体に受けていた風圧が弱くなる。

「もう大丈夫。リリー、目を開けて」

「わあ……」

ゆっくりと目を開ければ、目の前には威風堂々と城がそびえていた。当然ながら、城なんてこれまで遠目に見るか、すぐ傍で下から見上げたことしかない。こうして空から見ると、また違った趣があるね。

恐怖を忘れて見惚れているうちに、アムドさんが姿勢を変えて、ゆっくり下降し始める。

そのままそつと魔法省の広場に降り立つと、セドリック君が出迎えてくれた。彼も昨日まで私たちと一緒にヴェーデン侯爵領に出張していたけれど、一足先に報告を済ませているはず。

「おはようございます、みなさん。ゆっくり休めましたか？」

にこりと笑うセドリック君は私より年下の十五歳だけど、頼れる優しい魔法使いだ。

昨日も私とジルを気遣って、先に家に帰してくれたんだよね。

あとでなにかお礼しようかな、なんて考えているうちに、レオナルド様とセドリック君がお話を始める。やがて、レオナルド様がこちらに向き直って口を開いた。

「リリー、僕とジルはちょっと長に報告をしてくる」

長というのは、魔法省のトップの方。とても優しいおじいちゃんなんだ。

「わかりました。私もついていく方がいいですか？　それともここにいた方がいいですか？　侯爵家で王家のメイドと名乗った以上、報告書を提出しなければなりませんので、残る場合はその作業をさせていただきますとありがたいのですが」

公に王家のメイドと名乗ったので、私は王太子の部下だと認識されているはず。そ

のため、きちんと報告書を出さないと、後々王太子から呼び出されかねない。王家に繋がりを持つ者が勝手なことをしないようにって監視の意味があるのだ。とはいえ、今回の件で私は脇役みたいなものだったから、これといって実のある報告は書けないと思うけれどね。

すると、ジルが唇を尖らせた。

「えー、お母さんいっしょじゃないの?」

「だってジル、長^{おさ}つてことは魔法使いとしての報告でしょう? 私は魔法使いじゃないから、部外者……ええと、長^{おさ}にお会いする必要はないはずだもの」

私は不満そうなジルの頭を撫でつつ、レオナルド様の方を見る。

そうしたら、何故かレオナルド様がしゅんとしていた。

「僕が王家のメイドって紹介したから、リリーにも報告の義務ができたんだよね……ごめん」

確かに手間ではあるけど、謝るほどのことじゃないのにな。だからあまり落ち込んでほしくないとって、小さく苦笑しつつ首を横に振る。

「お氣になさらず。それで、どういたしますか?」

「城内の僕の部屋を好きに使っていいから、待ってほしい。シド」

レオナルド様が呼ぶと、彼の影の中からひらりと白い猫が躍り出て、一瞬で銀髪^{ぎんぱつ}の青年になった。レオナルド様の三人目の契約者で、闇の精霊シドさんだ。

「呼んだか、マスター」

「リリーを僕の部屋に案内して。報告書を書いてもらうから、紙とペンもよろしく」

「了解。んじゃ行くぞ」

「はい。それでは部屋でお待ちしています」

私は最後にもう一度ジルの頭を撫でて、シドさんに導かれるまま廊下を進む。

「報告書って、誰に出すんだ?」

「ヴェーデン侯爵領で王家のメイドを名乗ったので、王太子殿下にですね。渡すのはその側近であるアランですけど」

アラン、正しくはアランガルド・リンダールはリンダール侯爵家の長男で、若くして次期宰相と目^{もく}される優秀な青年。今は王太子第一の側近として頭脳面で王太子をサポートをしている。

彼は緩い癖^{ゆる}のある柔らかな金髪に、琥珀色^{こはくいろ}の穏やかな瞳を持つ、整った柔和な顔立ちの人物だ。その上、スマートだから、好青年と思われることが多い。

でも、実際は自分の外見のよさを自覚して最大限に利用する策略家であり、人を徹底

的に追い詰めるのが得意な腹黒だった。

悪人ではないし、優しい部分もあるにはある。だけど意地悪さの方が先に立つというか、生半可な報告書なんて作った日には、嫌味を雨あられのように降らせる人なんだよ。報告書は久々だからなー、ちゃんと書かないと。

なんて考えつつ歩いていると、すれ違う人からやけに視線を向けられる。嫌な視線というよりは、酷く驚かされているような雰囲気だ。

「どうした？」

少しとまどっていたら、私の様子に気付いたシドさんが首を傾げた。

「なんだか視線が……先日とは全然違う恰好だからでしょうか」

この間来た時はメイドらしい質素な服だったけど、今回はちゃんとドレスを着ている。上品でそれなりの身分がありそうな恰好だから、前回の服装を見ていた人が違和感を覚えたのかもしれない。

「そんなの、リリーが美人だからだろ？」

「はえ？」

うわ、びっくりしすぎて変な声が出た。シドさんってば、いきなりなにを言い出すの？

「多分、マスターが美人を連れてきたって大騒ぎになってるんだぜ」

「いやいや、美人じゃないから」

自分の見てくれくらい、客観的に評価できる。私は取り立てて特徴のない平凡な顔だ。スタイルだつて特筆する部分はない。良くも悪くもない尽くしですよ。

私の母さんやお兄ちゃんは美人とか美丈夫びじょうぶつて胸を張って言えるんだけど、いかんせん私は平凡です。というか、私の周りの顔面偏差値が妙に高いんだ。

まずレオナルド様はさらっさらの長い黒髪にあの顔立ちだし、美しいと表現するのがぴったり。

その契約者であるミスも美少女だし、アムドさんも恰好いい。シドさんにいたっては、レオナルド様によく似た美貌で人懐っこさと親しみやすさもあるから、実際モテモテだ。一緒に買い物へ行った時、女の子からの嫉妬の視線が半端はんぱじゃなかった。

そう考えていたら、シドさんが呆れたみたいに言い出す。

「美人だつて自覚ねえのか。ちゃんと守んねーと危ないな、こりゃ」

「いや本当にありえないですから。モテませんし」

「それはお前の兄貴の暴走が理由だろ。前にも言ったが、リリーに惚ほれてる奴はわんさかいるからな」

そういえばお兄ちゃんについて、そんなことを言われたねえ……実感ないけど。私に声をかけたい兵士の皆様がお兄ちゃんによって門前払いされていたらしいものの、ぴんところない。

「そもそも、私は美人じゃない方がいいのですが」

「あん？」

レオナルド様の部屋に入室しつつ呟くと、胡乱げに聞き返された。でも、シドさんはすぐに私に椅子を示す。

「とりあえず座ってろ。紙とペンだったな」

おそれ多くもレオナルド様の作業机をお借りするので、なるべく他のものに触らないようにしないとね。そう思いつつ私は返事をする。

「ええ、報告書を書くので」

「報告書用はこれだったか」

シドさんから渡された紙は、縁取りがされた公的な書類用のものだ。

「合ってます、ありがとうシドさん」

「別にこれくらい、礼を言われるようなもんじゃねーよ。で？」

「え？」

「さっきの続き。美人じゃなくていいって、なんでだ？」

一瞬、シドさんがなにを言ってるのか理解できなかった。というか、それがそんなに気になったの？

私とまどつていたら、シドさんは身を乗り出して答えを促す。

「なあ、教えろよ」

「……だって、自分が好きになってほしいたった一人に選んでもらえれば、それだけでいいじゃないですか。好きでもない人にモテてなにが嬉しいの、と思いませんか？」

「お、おう」

「もちろん、その人に選んでもらえるように努力するのは当たり前ですし、美人なら有利かもしれません。でも、厄介事の方が多そうですね」

「あー……」

納得したかな？ それじゃ、さつさと書きちゃおう。

しばらくカリカリとペンを走らせていたら、またシドさんが声をかけてきた。

「なあ、だったらリリーが好きになってほしいたった一人って誰なんだ？」

その言葉に、私はピタリと手を止める。

そういえば私、さっき話をしてた時に誰のことを考えてた？

私が、好きになってもらいたいと思ったのは――
 そこまで考えて、私は口を開く。

「内緒です」

「おい」

「内緒つたら内緒です。絶対に言いませんから」

「つてことは、誰かいるんだな」

「内緒です」

とりあえずは報告書を早く書き上げなきゃね。そっち優先だよ、うん。

「リリー」

「今、忙しいので」

これ以上はなにも話さないと言外に告げてても、シドさんの言葉は止まらない。

「そいつは、俺よりいい男か？」

一瞬間まりそうになったけど、そのままペンを動かして聞かなかったことにした。

だって、答えたら絶対に駄目だって頭の中で警鐘が鳴っている。

その質問は、今の関係が壊れてしまいそうで凄く嫌だ。だから無視するのは酷いことだとわかっていても、私は答えない。そしてシドさんも、それ以上はなにも問いかけて

こなかった。

報告書を書き終えた私は、昔のことを思い出していた。

そもそもどうして私が王家のメイドとなったのか。それは、私がとても都合のいい人物だったからだ。

一定以上の学と礼節があり、自分自身の置かれている状況を理解して行動ができる。その上、王太子妃を育てた実績があるため、王家が平民を雇用することに対する貴族たちの反発を抑えやすい。

しかも人質になりうる家族がいる。これだけ都合がいい人間、そうはいないよね。私が王太子と出会ったのは、私が元々仕えていたお嬢様が彼の妃に望まれたのがきっかけ。

その頃の王太子は信頼できる部下がまだ少なくて、なかなかあちこちに手が回らなかったらしい。そこに色々できるメイドが嫁と一緒にやってきたので、存分に利用したとのこと。

これらの理由は王太子直々に聞かされたものだ。そこまで明^あけ透^すけに言っちゃうのって、思わず笑った覚えがある。

私がなんだかんだ文句を言いつつも王太子を嫌いじゃないのは、こういうことでも隠すことなく伝えてくれるからだ。

この国の王太子カシルド・アル・ファンベルトは、王太子ではあるけれど、国王代行と呼べるほどの実権を握っている。

切れ者で行動力があり、柔軟な思考を持って堅実な政策をとる理想的な為政者——そんな評判を国内外で受ける人物だ。溺愛^{できあい}している嫁に関してはとんでもない真似^{まね}をするけど、それも愛情深くて一途^{いちず}と言われている。

彼が「ありのままに思うがままに行動しろ、その責任は俺がとるから、俺にやれないことをしろ」と言ってくれたことで、私は王家のメイドとして働くことを決意したんだ。レオナール様に出会うまでは、ずっと王太子のもとで働き続けると思っていたんだよね……

つらつらとそんなことを考えていたのは、現実逃避のためです。

若干遠い目になっていたら、横から「リリー」と呼ばれた。

「この私に黙って辞めようとしたことについての弁明は？」

にこやかにそう言ったのは、かつて王太子と一緒に容赦なく私をこき使ってくれていた次期宰相こと、アラン。さっきまでここにいたシドさんは、アランがこの部屋に来る

なり急いでレオナール様を呼びに行ってしまった。

「ありませんがなにか？」

「いい度胸ですね。前触れもなく辞めると聞かされた私の気持ちを考えてください」

「便利にこき使えた部下がいなくなると、仕事が溜まってイライラする」

「わかっていてではありませんか」

あははうふと、お互いに空笑^{そらわら}いをする。

アランは、ついさっき私が報告書を書き上げると同時にやってきた。その理由が私にお説教するためっていうのだから、もうね。

とんでもなく忙しい身なのに、なにしてるんだろう、この人。

思い返すと、私が王家のメイドを辞めることを王太子に話した日も、この間来た時も、アランが視察に出向いていたせいで会えなかった。

もし会ったら、絶対こんな風に嫌味を言われるのがわかっていたので、それでよかったんだけど。

「まったく、せめて私にも一言くらい寄越しなさい」

確かに連絡しなかった私が悪いものの……

「言ったら全力で辞める邪魔をしたでしょう？」

「当たり前です」

即答ありがとうございます。だから言わなかったんだよ。

「魔法使いマリエルにはせめて、優秀な人材を引き抜く覚悟くらい見せてもらわなければ割に合いませんよ。ただでさえ手が足りないというのに」

やれやれと言わんばかりに首を振るアランの言葉に、少し引っかかりを覚える。

「手が足りない？」

「もう貴女も知っているでしょう。各地で発生している、魔力持ちの子供が相次いで行方不明になっている件ですよ」

それについては先日知った。裕福な家の子供だろうと孤児だろうと、魔力が一定以上ある子供たちはばかりが消えているそうだ。

ジルも狙われていた可能性がある。以前、レオナルド様の屋敷を襲撃しようとしていた人たちがいたのだ。その時は、ジルの生家がジルを連れ戻そうとしたと思っていたんだけど……

「せっかく貴女がここにいるなら、潜入してもらいたい場所があるというのに」
ため息を吐いたアランは、恨めしそうに私を見た。

「領地に港がある貴族の屋敷でしょうか」



「おや、そこまで気付いているのですね？」

レオナルド様も子供が行方不明になっている件を調べていたらしく、出張中に少し話を聞いた。その時、結構な数の子供たちが消えていることから、船で運んだと考えるのが自然ではないかと推測していたんだよね。

アランも同じ考えなら、私たちの推理は限りなく正解に近いのだろう。こういうことに関するアランの勘は、外れた試しがない。

「ちなみに、レオナルド様はミユラ信仰についても気にしていましたよ」

ミユラというのは、愛を司る女神。女性を守るといふ触れ込みのため、女性に人気がある。

「なるほど？ 筆頭魔法使いだけあって、頭の回転は悪くないようですね。次席のウィンターよりよほど使えそうだ。会うのが楽しみになってきましたよ」

「いや、もう帰ってください」

「ふふ、大切な部下を横取りする人の顔くらい見えてから帰りたいではありませんか」

うーわ、凄くいい笑顔なんだけど。

シドさんに、レオナルド様を連れて戻ってきちゃ駄目だって伝えたい。

絶対ろくなことにならないでしょ、これ。

「リリー！」

思わず遠い目になっていたら、レオナルド様がいつになく慌てた様子で部屋に飛び込んできた。そのままガシツと肩を掴まれる。

「レオナルド様？」

「無事？ 酷いことされてない？」

……シドさん、なんて言ってレオナルド様を呼んだの。

あとから慌てて入ってきたシドさんもホッとしたような顔になった。

「よかった、間に合ったな」

なに、この反応。二人ともアランに若干怯えている？ 私は不思議に思いつつ、アランの方に聞いてみた。

「アラン、この二人になにをしたのですか」

「人聞きの悪いことを言わないでください。直接お会いするのはこれがはじめてのはずですよ」

「本当にそうなら、この二人がこれほど取り乱すはずがないでしょう。レオナルド様もそろそろ手を離してください、私は大丈夫ですから」

あ、素直に手を離してくれた。でも、叱られた子犬みたいな表情をしている。私、キ

ツい言い方をしちゃったかな？

私はできるだけ柔らかい口調で改めて訊ねた。

「アランは、レオナル様がそれほど心配するような相手でしたか？」

「ん」

うわあ、レオナル様だったら、はつきり領いた。え、本当にアラン、なにをしたのさ。私がぼかんとしていたら、レオナル様が言葉を続ける。

「アランガルド・リンダールの名前が責任者にある仕事は、終わりに絶対舞踏会がある」

「……レオナル様、それは普通に考えたら慰勞会ですよ」

「魔法使い、ほとんどが踊れないのに、なんで？ 毎回、舞踏会前には参加義務のある全員が揃って練習するんだ、仕事疲れでぐったりしながら。踊れるのは少数の貴族階級出身者だけだよ」

あ、それは苦行ですね。納得しました。つまりレオナル様はアランのことを、嫌がらせをする人だと思っていたわけだ。

それにしても、貴族階級出身の魔法使いかあ。

「その言い方だと、貴族階級出身の魔法使いはあまりいいのでしょうか」

魔法使いは国防の一端を担っているのだし、魔力が強い由緒正しい家系が存在して、そういった家同士での婚姻とかが多そうだなって、なんとなく思っていた。

私の疑問に、アランとレオナル様がそれぞれ答える。

「そう、ですね……魔力は遺伝ではありませんから」

「ん。完全に個人の資質」

私は以前耳にした話を思い出し、首を傾げた。

「ウィンター侯爵家は強い魔力を次代に残すため、政略結婚を繰り返していると聞いたことがあるような……」

「ああ、あれは……なんと言えがいいのでしょうか。どちらかというと属性による相性のいい相手を探しているのであって、純粹に魔力で選んでいるのではない様子ですよ。実際、今のご当主の奥方も魔法が得意というわけではなかったようです」

それに頷きつつ、私はウィンター家のことについて考える。

私が知っているウィンター侯爵家の人間は、次男で、現在は王宮魔法使いの次席であるスタウト・ウィンター。そいつが昔、お嬢様こと王太子妃殿下リディアアヌ様に求婚をしたので、少しだけ関わったことがあるんだ。

傍若無人で俺様な態度だったし、お嬢様を無理矢理攫おうとした、二度と顔も見たく

ない最低な男だった。

あと、ウィンター侯爵家そのものにも不穏な噂がある。話題に出た、スタウトの母親である侯爵夫人についてのものだ。当時の侯爵夫人にはすでに婚約者がいたにもかかわらず、現当主が力づくで奪ったという話だった。

元々の婚約者が他国の王族だったせいで、盛大な醜聞になったと聞いている。

そこまでして魔力の強い血筋を求めているんだと思ったのに、実はあまり確実ではないとか……なんだかなあ。

首を傾げたままの私に、アランが説明を続ける。

「それに、王宮魔法使いは貴族家の当主との兼任はできません。あまりに魔力が強い場合はその限りではありませんが、爵位を継ぐ者は魔法使いにはならないことが多いです。一族で魔法使い級の魔力を持つ者が複数人いない限り、貴族階級から魔法使いになる人は少ないですね」

そもそも、魔法使いになれるだけの魔力を持つ人自体が少ないんだものね……私なんか、魔法を使うどころか魔力を体の外に出すことすらできない魔力ゼロ体質だから、完全に雲の上の話だ。

この世界において、魔力は量こそ人によって違うけれど、誰だろうと持っているもの。

魔法は体の中にあるそれを外に出すことで発動させるけれど、その量が一定以上ないと使えない。

多くの人は魔法は使えないものの、魔力を外に出すことはできるから、魔法の代わりに魔石を使っている。魔石は魔力を流すことで反応させ、封じ込められた魔法を発動させるものだ。けれど、私にはそれもほとんど使えない。

私に使えるのは、火をついたり明かりをついたりする日常用の簡単な魔石だけ。でも、今はレオナルド様が造ってくれた腕輪があるので、彼の魔法具ならば使用できる。ちなみにこれは、魔力ゼロ体質の人間が魔力に長時間触れると起きる、魔力当たりも防ぐ優れもの。

そうだ、魔法省について気になっていたことがひとつあるんだけど、ついにはアランに聞いてみようかな。

「ちなみに、次席は長に次いで魔法省で二番目に偉い地位という認識で合っているのでしょうか？」

「ええ、そうですね」

「……では、レオナルド様の筆頭魔法使いというのは、どういう地位になるのでしょうか？」

これ、前からちよつとした疑問だったんだよね。

「ああ、わかりにくいですよ。魔法省全体を統括するのは長、その下が次席で、あとは部門ごとに分かれている。ここまではいいですか？」

「ええ、そこまでは。部門ごとにも責任者がいるのですか？」

そう訊ねれば、レオナルド様も頷いた。

「ん。でも、役職としては長と次席のふたつだけ。僕はいくつかの部門を兼任しているけど、公式な役職はない」

「……筆頭魔法使いは、役職ではない？」

私が首を傾げると、アランがすらすらと説明を続ける。

「筆頭とは魔法省で最も魔力が強い人を示す言葉で、これまでは、それは長であつたことがほとんどですよ。ですが現在の魔法省においては、マリエル殿が最も魔力が強い魔法使いです。具体的な役職ではありませんが、その実力から長と同程度の発言力を持っています」

ちよつと話が脱線したけれど、とりあえず魔法省の役職についてと、貴族階級出身の魔法使いが少ないのはわかった。

「それにしても、舞踏会については困りましたねえ」

話が一段落したところで、アランがふいに口を開く。

「ああでもない魔法使いを表舞台に引きずり出せないの、こちらとしてはぜひ参加していただきたいのですが」

全く困った様子もなく満面の笑みを浮かべているアラン。まあ、私からすると彼の言いたいこともわかるのよね。

「下手に貴族に魔法使いを取り込まれたら困るから、でしょう？」

私の言葉に、レオナルド様がよくわからないと言わんばかりに首を傾げる。

「リリー？」

「貴族の中には、権勢欲から魔法使いの皆様へ個人的に接触をする人もいます。そのため舞踏会、それも国が主催するものに魔法使いを招くことで、そういった貴族を牽制するのが目的かと。魔法使いはあくまでも国の臣下だと示したいんだと思いますよ」

私の話を聞いて、レオナルド様はなんとなく納得した様子で頷いた。

「確かに、魔法省に入ったばかりの頃は貴族から変に声をかけられることが多かったかもしれない。じゃあ、舞踏会出た方がいい？」

「レオナルド様ほど有名になれば、もう必要ない気がしますけど。多分、アランとして

はレオナルド様には違う理由で来てほしいのでは？」

私がそう言うと、アランはニヤリと口の端を吊り上げた。

「さすがはリリー、やはり手放したくはないですね。そうです、魔法使いマリエルが来ると来ないでは、貴族たちの反応が大きく変わる。簡単に言えば、魔法使いマリエルを取り込みたい貴族たちが娘をけしかけてくれるので、注意を払うべき相手が非常にわかりやすくなります」

褒められている気がしないよ。それに、レオナルド様を利用する気満々なことを隠そうともしない発言だなあ。

王宮魔法使いは当然ながら王家の管轄にある組織だ。この国における優秀な魔法使いが揃っていると言っても過言ではない。

そんな彼らを、たとえば結婚相手として一族に迎え入れることができれば、自分の家に味方する魔法使いが手に入る、と考える貴族がいる。

強力な力を持つ魔法使いと少しでも仲がよければ、それだけで他者への牽制になると考える者もいる。

また、王宮魔法使いともなれば爵位こそなくても一代限りの貴族同然の地位なので、玉の輿だと思っただっているのだ。

そういった下心を持つ人々は、当然ながら私欲で働き、国のために動くことはほぼない。だからこそ、そんな彼らを観察することで未然に面倒な事柄を回避するのに役立たいのだろう。

うん、大体アランがなに考えているのかはわかるよ、わかるけどね。

「レオナルド様を囿にしないでいただきたいのですが」

「魔法使いマリエルが特定の誰かを連れてくれば、それだけで群がる連中の半分は減りますよ。まあ、それでも残る者こそ、私が炙り出したい人物ですが」

結局、炙り出そうとするのはやめなのね……いや、こういう人だって知っていたけど。使えるものは自分自身でも容赦なく使う人だもの。

「……それ、連れていくのは誰でもいいんだよね？」

それまで黙っていたレオナルド様が顔を上げて口を開く。

「そうですね、魔法使いですから相手の身分は関係ありません。ただしその方への風当たりは厳しいものになりますよ」

アランがそう言うと、レオナルド様は少し躊躇ってからこちらを見た。

「リリー」

「……やっぱり私なんですわね」

とほほ。嫌な予感はしていたんだ。というか、相手の選択肢は私しかないとなっていた。それに、以前にもレオナルド様から舞踏会に一緒に行ってって言われていたし。でもね、本当は行きたくないんです。

「王家のメイドなら申し分ない相手になりますね」

にっこりと笑うアランに、恨めしい思いで視線を向ける。

「楽しんでるでしょう」

「もちろん。どうせ私のもとからいなくなるなら、せいぜい今のうちに役立ってもらうと同時に、楽しませてもらいますよ。……ですが、今から思えば私がリリーを無理矢理嫁にしていればよかったですかね」

これまで笑っていたアランが、ふと真面目な顔になる。

「そうすれば、貴女はずっと私の傍にいたはずですから」

「アラン、貴方は愛することもできない女を妻とは呼べない人でしょう？」

「ええ、残念ながら。ですが、リリーならそれを曲げて妻にしてもいいと思います」

……は？

いや、笑顔で言われても、えええ!?

「私が口にするより先にこちらがなにを考えているのか理解して行動する有能なところ、

何事もなるべく穏便に収めようとする優しさ。愛せなくても、妻にするには充分ですよ

ね」

「アラン、本心が丸わかりです」

思わず突っ込んだ私は、絶対悪くない。今のアランの言葉は、妻という名の便利屋が欲しいって言っているのと同じだもの。

「おや、酷いひどいですね。私はこんなにもリリーを欲ほっしているのに」

「便利に使えるリリーがいれば仕事が楽になるので欲ほっしているのに、でしょう？ ただの部下ですよ、それ」

要するに、気心が知れていて外でも仕事をさせられる女性が他にいないから、逃げられないようにしておけばよかったって言いたいのだ。普通に怖い。

「まったく、そこまで見抜かなくていいです。この状況に、たまには年頃の女性らしく頬を染めたり恥じらったりすればいいのに。マリエル殿も私も、顔はいいと思いますよ？」

自分で言うか。確かにアランだつてかなりの美形だよ、でも、それも武器にしているせいで素直に認めにくい。

大体、美形だからってだけできやあきやあ騒ぐものでもないよね？

「はつきり言えば、アランの顔は綺麗だと思いますが好みじゃないです。レオナルド様は好みですが、いちいち反応していたら仕事になりませんよ」

「人生をもっと楽しんだ方がいいですよ、リリー。貴女は生き急いでいるようで、イライラします」

「その楽しみが恋愛を指しているのならいいですね。それに今は、ジルの母親をするのが楽しくて仕方ないので」

そう言っただけ見よがしに、にっこりと笑ってやる。

確かに、レオナルド様に出会うまでは生き急いでいたかもしれない。

でも、最近は毎日が楽しいんだ。ジルやレオナルド様が笑うたびに嬉しくなつて、ずっと一緒にいたいって思える。だから、生き急いでなんかいい。

私は、自分の居場所を見つけたんだから。

「あと、私はひたすら人をこき使う男性の妻になるくらいなら、死んだ方がマシです」

「はつきり言いますね、その通りこき使う気ですが」

楽しそうに笑っているアランにちょっとイラッとしたので、少しばかり意趣返しをしてやる。

「きつとアランは、いつか働きすぎだからっておとりした貴族のお嬢さんを押すつ

られるんです。それで最初はイライラするけど、なんだかそのペースに吞まれて、彼女の傍だと適度に肩の力を抜くことができるようになり、手放せなくなるんですよ」

「なんですか、その予言」

「そうやって振り回されまくればいいのという、私の願望です」

真顔で言い切ったところ、アランは口の端を引き攣らせた。その様子に満足した私は、書き上げたばかりの書類を彼に押しつける。

「はい、王太子への報告書。どうせ説教だけじゃなくて、これも目的だったんでしょ？」

「本当に、嫌味なほど優秀ですねリリー。よく書けていますすし」

私の報告書にざっと目を通したアランは、それを懐へしまい込む。合格ってことですね、よし。

それから、私は話を少し前のことに戻した。

「ところで子供の行方不明事件について、先ほども言った通り、港を持つ貴族が関わっていると私なりに考察しています。アランも、似たような結論なのですよね？」

私の言葉に、アランがゆっくり頷く。

「そうでしょうね……目的だけが不明ですが」

「報告書にも書いてありますけど、ヴェーデン侯爵領に精霊狩りが現れました。もしそ

の精霊狩りも子供たちを攫ったのと同じ組織にいるのなら、なんとなく動機が見えてきますが、いかんせん現状では確証がないですね」

精霊狩りとは、精霊を捕らえたり自身に取り込んだりして、精霊の力を無理矢理利用する者を言うらしい。

そんな存在が強い魔力を持った子供を攫うというなら、子供たちに精霊と契約させた上で自分自身が精霊を利用する……なんて可能性が考えられる。もつとも、憶測でしかないけれど。

「なるほど……敵については最悪の事態を想像しておくべきですから、そのつもりで考えてみましょう。本当に精霊狩りが関わるならば、またリリーに会うことになるでしょうしね」

そう言って、アランはとてもしよい顔で笑った。

「精霊狩りだと断定されれば、魔法使いマリエルに調査依頼がいくのは確実。そうなればリリーにも王家のメイドとして最後の仕事を頼めます」

私は半ば呆れ、碎けた口調でアランに突っ込む。

「転んでもタダじゃ起きないわね、アラン。レオナルド様の役に立つなら構わないけれど」

「言ったでしょう？ 手が足りないよ。まあ、二人の報告書を読んで殿下と話をしましょうから、それ次第ではあります。ですが、おそらく手を借りることになると思いますよ。魔法使いマリエルがついているのなら、こちらも安心して計画を立てられます」

「それって、リリーを危険な目に遭わせるってこと？」

ヒヤリとするほど冷たい声を出したレオナルド様。だけど、アランは動揺した様子もなく穏やかな笑みを浮かべて鎮く。

「そう、今までと同じように。マリエル殿、リリーをか弱い女性と誤っているのなら間違いです。彼女は私たちが仕事を任せるに足る、信頼すべき女性ですから。ただ囲って守るだけのつもりなら、私のところへ返してもらいますよ」

「僕は――」

「戻らないわ、アラン」

なにかを言いかけたレオナルド様を遮って、私ははっきりと宣言する。

「私を必要としてくれるのは嬉しい。でも、たとえレオナルド様が私を必要としなくなっても、私は城に戻るつもりはないの」

「何故ですか、リリー」

「……もう、王太子のために死んであげられないから」

一番が決まってしまったので、他の人のためには死んであげられない。そんな私が、今までみたいに役立つことはできないだろう。

その時、ぶすつと話を聞いていたレオナルド様が唐突に言い出した。

「僕がリリーを必要としなくなることなんて、ない」

「レオナルド様、ですが」

「傍にいてくれるんでしょう?」

レオナルド様の顔は本当に悲しそうで、私の心臓がぎゅうつと痛くなる。こんな顔をさせたくないのに、これほど求められて嬉しいと思ってしまう。

「はい、レオナルド様が望んでくださる限り、お傍にいさせてください。それが私の望みでもあります」

「じゃあ、ずつといてね」

ふわりと笑うレオナルド様に、私も微笑み返す。

そんな私たちを見て、アランが不思議そうな表情になった。

「どうしてそんなにもリリーが彼に執着するのかわからないのですが」
アランはとても鋭い人だから、私の前世について、なんにも言えない。ちよつとでもヒントを口にすれば、きっと私の秘密に気付いてしまうだろう。だから、これしか言え

ない。

「レオナルド様だけが、許してくれたの」

「許す? なにをです?」

「なんにも話さないことを。それなのに、家族だと言ってくれた」

私が言いたいこと、アランになら伝わるよね? そんな思いを込めて彼を見たら、苦虫を囁み潰したような顔をしていた。

「……そう、ですか。なんにも話さない不審人物でも受け入れたと」

「王太子もアランも、それはできないよね」

「ええ。立场上無理です……リリーには、話せないことがたくさんありますよね」

「レオナルド様はそれでもいいと言って、受け入れてくれた。ねえアラン、これ以上心が休まる場所は見つけれないと思わない?」

「そうでしょうね。その場所が貴重だというのはわかります……少々腹立たしいのは変わりませんが、まあいいでしょう」

アランは「それでは」と立ち上がり、踵を返して部屋を出ていこうとした。なんとか無事に終わったか、と私がホッとした瞬間——
「そうそう。リリー、ルチルが戻りましたよ。酷く貴女に会いたがっていました。マリ

エル殿もお気を付けなさい、油断していると横からかつ攫われますよ」
去り際にとんでもない爆弾を落つこととしていくところが、アランらしいと言えばアランらしい。だけど、その言い草はあんまりじゃないかしら。

いやあ、アランが退出してから、レオナール様が滅茶苦茶不機嫌になって大変だった。アランの発言にシドさんも最初は怒っていたけど、レオナール様の不機嫌っぷりに、宥める側に回ったくらいだもの。どうも、ルチルが私に会いたがっているという話に反応したみたいだけど、そんな怒ることかな……

シドさんは仕事を頼まれてどこかに行ったので、執務室には私とレオナール様の二人だけに。今は、二人でソファアーに並んで座っている。

それにしても、ルチルが帰ってきているのか……ルチル、私が黙って王家のメイドを辞めること、怒るかな。怒ると怖いんだよねえ。

私がなにか考えているのに気付いたらしく、レオナール様が訊ねてきた。

「リリー、なにを考えてる？」

「ルチルに会ったら怒られそうだなと」

やっと不機嫌が治りつつあるレオナール様には申し訳ないけど、隠し事をする方が失

礼だと思うので素直に答える。すると、案の定また機嫌が悪くなってきた。

「ねえ、リリー。ルチルって、誰？」

「彼は私が王家のメイドとして貴族の家などに派遣されていた時に、一緒に潜入してくれた隠密です。歳は私よりひとつ下ですが、隠密としての実力は申し分ない人で、私にとって大事な親友なんですよ」

ルチルの名前は、針水晶はりすいしょうという意味を持つ。彼は柔らかな薄茶の髪と琥珀色の瞳の優しい青年だけど、それに油断した敵を名前の通りの鋭さで容赦なく貫く人だ。

彼は子供のように無邪気で明るいのに、手を血で汚すことを厭わない強さを持っていて。

ルチルは私を一番の相棒と呼び、仕事で組むことを喜んでくれた。それなのに彼に王家のメイドを辞めると伝えていなかったのは、人づてにせず自分の口から言いたかったためだ。

「彼ってことは、男性なんだ……リリーは、その人に会いたいの？」

「会いたいですね。レオナール様のメイドになる話もしていませんから、多分怒られますけど」

素直に頷くとレオナール様は小さい声で問いかけてくる。